

上 沢 謙 二

「保育界の忘れられない人」という題に接して、先ず思い出されるのは「倉橋惣三」という名であります。この名に、はじめて接したのは、大正十三、四年頃だったと思います。

雑誌「幼児の教育」に、毎号、掲げられた巻頭文がそれであります。

たぶん、先生は、その主筆のような位地にあつたと思われます。

それは、一ページくらいの短いものでしたが、まことに味わいのあるもので、私は、それにひきつけられました。そのところどころを、自然に暗記して、ふと、口の中でくりかえすことも、時々ありました。

「幼稚園雑草」とか「幼稚園保育法真諦」とか「子供讃歌」とかいう著書は、むしゃぶりつくようにして、読み入り読みかえました。

まず、先生は「天成の幼児教育者だ」といえましよう。

大学在学中から、いかに、この方向に思いをひそめ、力を入れられたかは、著書の「子供讃歌」の中に、はっきりと描きだされています。実をいえば「思いをひそめ」とか「力を入れられた」とかいうのは当たりません。「おのずから、われ知らず、そうなつた」というのが、より真相をあらわしているでしょう。

一高の学生時代から、よく、お茶の水女子大学付属の幼稚園へ出かけました。誰にたのまれたのでも、誰と約束したのでもありません。時間があると、むしろ自然に、その方へ、足がむくのです。

「子供讃歌」の中の一節をひきましよう。

「ふらりと、湯島通りの門からはいると、すぐ庭の方へまわつて、幼児たちの中へはいって遊ぶ。一高の学生というので信用されたものか、おばさんのような先生方や、姉のような先生にも懇意にされたが、一番、親しみ迎えたのは幼児たちであつた。『おにいちゃんかきた』幼児たちは、彼のそばに集まつてきては、そういって、ひっぱりまわした」

後に、その学生が、そのお茶の水女子大学の科長に就任し、その幼稚園の園長になつたことも、まことにほえましい因縁といえましよう。

倉橋惣三先生(その二)

先生は教室において学生に講義をしましたが、特別な会場において、一般の人々にむかつて講演もしました。講義にも特徴がありました、講演にも特徴がありました。

いささかも気取ったりしません。ありのままのようすで、にこにこしながら、やさしいことばで、簡単な組立てて話しました。その態度と内容には、田舎のおじいさんおばあさんもひきつけられました。時々、さしはさまれる一種の洒落(しゃれ)とユーモアには、誰でもひきこまれて、いっしょに笑わないではいられませんでした。しかも、先生としては特に笑わせようと思ってそういうのではありません。その場の調子で、おのずから出てくるのです。だから、いささかも人為的でなく、まったく自然です。だから、深く相手の気分にあわせて、心からの笑いを触発するのでしょう。学術的な講義者としても独特なものをもっていた先生は、通俗的な講演家としても、他の及びがたいものをもっておりました。

先生自身がこのことを自覚しておられたようです。深い学術的な理論や専門的な問題を、一般の人にわかるようにこまかく噛みくだいて、やさしい形式で、興味深い表現で発表することに、人知れぬくふうと努力を傾けられたと思われまます。

こういう先生が、わが国の教育界の一つの中心であるお茶の水女子大学におられたということ、しかも教育の一般化民衆化が叫ばれはじめた明治時代におられたということは、先生一個人の立場からでなく、わが国の教育界という広い観点から見ても、意味深いものがあったと思われまます。

公的な講演の時だけではありません。私的な対談の場合でも、先生の特徴ははつきり出てきました。

「温顔温谷」ということばがありますが、先生は正にそれに当たると思います。

むきあつて話していると、自然に、あたたかいのんびりした気持になります。その間に、巧まないユーモアがしばしばはさまれるので、教え導かれるという以外に、一種のたのしみでもありました。

倉橋先生は学者であり、教育家でありました。しかし更に詩人でもありました。